



Title	対談：ほんまなほ×金和永×菊竹ももえ×小泉朝未 (質問・コメント担当：小西真理子)
Author(s)	ほんま, なほ; 金, 和永; 菊竹, ももえ 他
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 206-217
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/103645
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集3 第17回臨床哲学フォーラム「社会の臨床、そのメチエとエチュード」
シリーズ第2回：社会の臨床と実践の〈メチエ〉

対談

ほんま なほ×金和永×菊竹ももえ×小泉朝未
(質問・コメント担当：小西真理子)

ほんま ありがとうございます。

臨床哲学でおこなわれている授業や活動のことをご存知ない方のために、すこし補足しておきますと、金和永さんも、菊竹ももえさんも、かつて「対話技法論」という授業に在学中に参加されていて、受講したひとたちがほかの学校や地域などでやってみる、という活動がありました。それ以外にも、昔、臨床哲学研究室では、臨床哲学を学ぶひとが外で活動するための準備作業やミーティングをする授業が、堀江さんが大学院生であった時代からずっとあって、その名残として「臨床哲学ネットワークワーキング」という授業がおこなわれていた、というのが金和永さんの話の背景にあります。もうひとつ、菊竹さんがちらほら言及されていましたが、いまみなさんがおられるこの場所は、COデザインセンターのワークショップスペースなんですけど、ことばで話すだけじゃなくて、いろんな身体的な表現、だれでも表現できることで、表現を見つけていく、というさまざまな授業を展開しています。授業だけでなく、学外でも活動していて、最初、菊竹さんに会ったときには、菊竹さんは阪大のオーケストラ部に所属しておられたのを、わたしが「オーケストラみたいな権力的な楽器をやってないで、わたしといっしょに遊びに行きましょう」って無茶を言って、たんぼぼの家でやっている即興表現のワークショップに誘ったのが、きっかけだったりします。来週も、「身体表現術」という即興表現の授業がここであるんですね。わたしからみると、そういういろんな大阪大学のリソースをうまく使っておられるなどおもいます。大阪大学では、臨床哲学だけでなく、鷲田さんがつくられた「コミュニケーションデザイン・センター」(現在はCOデザインセンター)の開講するいろんな教育リソースが充実しているんですね。充実というか、わたし自身がリソースでもあるといえるのですが… (笑)

小泉 小泉朝未といいます。わたしは大学院から臨床哲学研究室に入りまして。いろいろ話を聞きながらおもい出していたんですが、わたしは[学部的时候にやっていた]ダンスを続けたいとおもって、臨床哲学研究室に入らせてくれとお願いをして、入ったという経緯で…

ほんま ある日、とつぜん来ましたよね。「わたし、ダンスを研究したいんです！」って。

小泉 そう、ある先生に紹介されて、コミュニケーションとか、そういうものに興味

があって、身体表現について研究してきました。その一方で、最初に出てきたような、大学院の変革という流れの中にも、すごくいまして、イノベーション博士人材を育成するという「リーディング大学院プログラム」にも挑戦し、奨励金をもらいながら、5年間かけて博士論文を出す、というのをやっていました。なので、結構、わたしのなかで、大学院のときは生活が分裂していて、一方で、ものすごい過密な、社会科学の調査法を学んで、フィールドワークに出かけるプログラムをこなしつつ、もう一方では、和永さんとか菊竹さんが同期だとおもうんですけど、対話の活動をやったり、表現というかダンスというか、なんていうか、ペットボトルをあたまに乗せてあるく、みたいな不思議なこと [身体表現ワークショップ] をしたり… (笑) そういうことをしながら論文も書いたりして、わたしも博士論文を書かせてもらい、それもお願いして書くみたいな感じで、固い意志に基づいて書いて、いまはですね、研究者という形では、あまり活動は下火になっているというか、一般社団法人で、行政からのお金をもらって運営しているところなんですけど、芸術家を支援する団体に働いていて、どちらかというところ、福祉などのちがう領域のことと文化活動とを一緒にやりたいひとたちが相談に来るようなところで相談を受ける仕事をしています。それは、ソーシャルワークを一応モデルにはしている仕事なんですけど、わたしの上司に当たるひとが、障害のあるひととの表現活動をずっとやっていて、そういう専門人材は日本にはいないからやるべき、という感じで始めたところで、いまは仕事しています。研究的な関心ももちろん続いています。

ほんま おふたりの話を聴いて、どうおもいましたか？

小泉 そうですね、大学院時代に、お二人との、いまみたいには働いておられなかったころの出会いから、こんなふうにかんがえているということがわかって、なんていうか、ああ仕事してるな…みたいな

[聴衆が笑う]

ほんま みんな笑ってるけど、仕事するの、たいへんなんよ！

小泉 そうなんです。ほんと、仕事するのは大変で、結構、苦勞多いなっておもいます。頑張らないと仕事ってできないなとおもったりして、でも、そこでむりやり臨床哲学を、学んだことをかんがえたりとかして。わたしの職場で会うひとたちも福祉施設で勤務してたり、支援の活動してるひとがたくさんいるんですけど、でもやっぱり、学んだこと、それが臨床哲学なのか哲学なのか、ちょっとわからないんですが、人間を、その痛みとか、苦しみをまず分類した形で見るというのではなくて、やっぱり、いっしょにそこにいるなかで、何か悩みながらいっしょにかんがえているというか、大きい言葉にまず当てはめてからそれをかんがえるんじゃなくて、自分なりの言葉でちゃんとかんがえていたりとか、いま、この場でも、話すことによっ

てかんがえようとしているみたいなことは、臨床哲学という場所だからこそできるのかなと。

そういうひとには仕事の間でも会わないんですよね。やっぱりちゃんと仕事していくことも大事だし、そこで立場を得ていったり、お金を得たりということも重要なときに、大きいことばを操っていくのも大事なんですけれども、でも、その大きいことばを操ってるのか、大きいことばに操られているのか判然としないみたいな状況になってしまいがちだし、それは加速してる感じがしていますね。

わたしの印象では、SNSもあるし、社会科学的なこととかも とくに福祉とか支援の現場だとやっぱり流行みたいな感じで、結構、みんな知ってたりするとおもうんですよ。「いまこういう本が出てる」とか、いまは「インターセクショナリティ」というのがどうだとか、アートの世界でも言われる。それでいいのだろうか、とかかんがえたかったことを、ちゃんとかんがえることをお二人はされているので、わたしはファンだし、二人を見て、元気をもっている、そういう感じがします。

ほんま お二人が前を走っておられるのを見れるって、メチャクチャ、ラッキーですよ。誰もいないままで走っていくじゃなくて、先に走ってる人がいるってラッキーですよ。

小泉 そうですね、距離も近いですし。

ほんま 組織というのは、別にそこで働かなくても、その利用者になっても同じなんですけど、組織が間に入ってくると、突然、人間はいなくなるんですよ。「先生」とか、「看護師」とか、「利用者」とかはいるんだけど、人間はいなくなるんです、なぜか。なにを言っても、すぐ、「それはできません」となる。大学の先生も、自分のことを人間だとおもっておられるかもしれませんが、試験とか学位付与とか、じつは権力によって用意されたことをやらされているだけで、だから、人間じゃなくなるんです。だから、すごくお二人が——小泉さんの現場の話は聞けなかったんですけども——仕事場とか組織のなかで、人間であり続けるということが、すごくむずかしいにもかかわらず、きょうお話しされたお二人は、組織のなかにも、人間でいる、あり続けるというのはすごいことだな、とおもいました。それでは、小西さんから質問をおねがいします。

小西 まず、みなさんのお話を聞いてすごく懐かしい感覚になりました。わたしは2018年に阪大に着任したんですけれども、そのときはちょうど、菊竹ももえさんが[修士を]修了された直後のタイミングでした。当時は卒業生の何人かでコースアシスタント[助教の代理業務]の仕事を分担されていて、菊竹さんはそのお仕事をされていたんです。なので、ぎりぎりいっしょにかかわらせていただいたことがあったんですね。金和永さんは、そのころまだ大学院におられましたね。2017年くらい

から、さきほどお話しされた活動をされていたということでしたが、その活動のただなかにはいっしょだったのもあって、活動と両立させながらときどき授業に来られて研究発表をされていましたね。研究を学術としてかたちづくるというよりも、その背景にもものすごく大切にしている想いがあるというのが伝わってくるような感じでした。研究者としてやってくると、とにかくかたちにする、どんどん前に出ていく、ということを経験されることもあるし、着任後からは特に、それが義務のように感じる場所に立たされることもあります。そういう場所とは違う感覚になれるというのが臨床哲学研究室にはあったな、ということをおもい出しました。方向性も語り方も全然違うんですね。

あと、ちょうど [旧文学研究科に] あった対話教育の立ち位置が、変換された時期だったんですね [注 2017年から、文学研究科開講「対話技法論」に代わって、COデザインセンターで「対話術」が開講された]。そういう意味では、わたしが2018年に着信したときが、[旧文学研究科での] 対話の授業を受けたひとたちに接する機会をもつことができるぎりぎりの最後のタイミングだったんだと強く実感しています。それがわたしにはとても大事なことであった、とおもっています。

お二人の話は、すごく共感的なスタイルで聞いたところが多かったですね。和永さんは「何か臨床哲学で学んだことを明示的に活かす、というわけではないけれど、臨床哲学での学びが今の活動にどこかつながる」と言われました。わたしは研究者ですけれども、だからといって、そういう感覚に大きな違いをあんまり感じません。何か研究をかたちづかって、これで何かを得ることによってどうする、というよりは、どこかで得たものがずっと続いているという感覚があります。それは、この研究室に来させてもらってから、この場所にいるひとたちからも感じることで、和永さんのお話を聞いて、そういう感覚を再確認しました。

そして、菊竹さんの現場のお話が、まさに、わたしも調査などでよく聞いているようなお話がすごく多くて驚きました。長年研究者をやってきて、わたしが話すような内容はすごく摩擦を生じさせてきたというところがあるので、こんなに当たり前のこととして共有されている感覚に心地よさも感じてしまいましたね。生活保護の受給の話とか、重なるところも多かったです。そういう話を、その文脈通りに聴ける方が現場にいてくださるということは、すごく大きいことなんじゃないかとおもいます。既存の研究をいろいろ調べても、そういう話はなかなか出てこないというのが、おもったことです。

そこで質問です。例えば、こういう話、つまり、哲学を仕事にするという話題に光が当たるときに、わたしがよく耳にしてきた問いかけがあります。みなさんは臨床哲学を活かす、というわけでもないけれども、誰かとつながりながら臨床哲学をたずさえて仕事をしている、要するに、臨床哲学をたずさえて食べていくということをされているわけですね。このように食べていくこと、稼いで生活をしていくことが関係するとき、——そんなのあまり気にせずに、[仕事を] やってきたよって、ということもありえるかもしれないんですけども——同時に、博士課程で哲学をして、研究者の道もはっきり言って結構厳しくて——驚田さんがかんがえられてたよ

うに、いろんな道をかんがえないといけないなかで、みなさんのような実践のありかたは一つのルートを示してくださっているとおもうのですが——それでもなお、[食べていくことへの] 不安というのは大きい、というのをよく聞きます。みなさんがその点についてどうかんがえておられるか教えてください。

[可能性としては、過去の臨床哲学で検討されたことがあったように] 哲学を[職業につくための] 資格にすることもありえます。研究者[として地位を得ているひとたちが] が所属を持ちながら[例えば対話の活動などを] お金を取らずにやることによって、そういう意味での所属をもたないなかで臨床哲学的活動をしてるひとたちがお金を得るという意味で壁にぶつかってしまう、ということもあるでしょう。実際に哲学の活動に依拠して生きていくとはどういうことか、どうしたらそれができるのかということが、臨床哲学のなかでかんがえられてきたことである、と受け取ってるんですけど、みなさんはいかがですか？

菊竹 さっき、ほんまさんも言われたように、組織のなかでどうしたらいいのか、いろいろかんがえたりするんですけど、難しいので… お金のことはいつもかんがえてはいるんですよ。組織のなかで働きたくないなという気持ちはつねにあるので、ほかで働きたいな、とめっちゃかんがえていて、いまも、ライブでいくら儲かったか、ちゃんと計算して、でも、それが哲学の活動になるかどうかわからないですけど…

金 まずは、不安しかないですね。わたしのいるNPOがいつまで存在するか… というのは、いま東京でNPOがすごいバッシングを受けていてね。「なんか社会活動は怪しい」ってことになってますから。行政とか国からお金がおりてくるっていうことは、なくなっていったりはしないとおもうんですけども、助成金ではそもそも団体として持続可能じゃないんですよ。それは事業のためにもらうお金だからね、それが団体の利益になるわけじゃなくて、しかも、「その事業は継続性が求められます」と大体そうなんです。3年たったら[助成なしで]それが自走できるようにしてください、持続可能性もかんがえて3年使ってください、3年後からは自分たちの財源でできるようにしましょう、というのがいまの一般的な社会活動に行政からお金が出るやりかたです。それはもう、助成金だけでやっていると自転車操業にやっぱりならざるを得ないわけで、新しく雇用をすといっても、いまの雇用を維持するだけでもほんとに精一杯になっていくし、なんかやりたいとか、いまこれやらなあかんって言ってやるけど、すぐに手放すことになってしまったり、報告がめんどくさかったり、実際とは違う説明の仕方をしないといけなかったり、そういうのがずっとあるから、やっぱりそういうのもどうかとおもいますよね。だから、わたしたちの団体の上の人たちがよく言うのは、NPOでも自分たちで財源確保していかないといけないですよ、と。

それは団体がちゃんと稼ぐ、社会活動してるところが自分たちで稼がないとダメですよ、と言っていて、それはわたしもそうだなとおもうんです。いまの話は哲学という話じゃないですけど、誰しも社会活動で食い扶持を得るためには稼ぐと

いうのは必須です、っていうことかなとおもいます。行政からの委託というのが何十年単位で続くことがない限り、稼ぐということかंगाえずにはいられないということかなとおもうんで、哲学をやっているもいっしょかな、と。

ほんま どこかの国の学術会議のひとたちに聞かせたい意見ですね。NPOの問題というよりも、国家や行政に依存した組織は、ほんとうの意味で持続しない。教員組合とか、さまざまな中間団体が解体されて、国家と個人が直接対決するしかなくなっているんですよ。もちろん、ベーシックインカムとかセーフティーネットとか、国が保障すべきという議論もありますけど、そういう上からではない、下からの相互扶助をどうつくるのかがだいじですよ。行政からの委託じゃなくて、自力でやっていこうとする生野の試みも、あるいは西成の釜ヶ崎も、そういう点で注目してるんですが。CaféPhiloをみんなで作ったのも、哲学者の組合みたいなものが必要だとおもったから、というのもあるんですけどね。

菊竹 資格のことですけど、精神保健福祉士って紙きれ一枚なんですよ。資格といえど、看護師とか薬剤師って資格と業務が結びついているんですが、社会福祉士って決まった業務や仕事はなくて、スキル、資格と事実は別につながってないんです。基本的には福祉は稼ぐんじゃなくて、国からお金をもらってする以外は仕事がない。まあ、弁護士とつながるとか成年後見の仕事だけひたすら受けてるとか、そういうひともいますけど。それ以外だとじぶんで仕事をつくるしかない。

ほんま 菊竹さんのエピソードを聴いて、哲学プラクティス（個人開業の哲学所）をはじめた、ドイツのゲルト・アーヘンバッハのことをふとおもいだしました。「カウンセリング」と訳すと、心理相談や心理療法のことをひとはおもい浮かべるのでよくないのですが、アーヘンバッハは、いわゆる心理療法家や医者が専門家として話を聞くのではなくて、対話をするのだ、だから相手のことを「ゲスト（訪問者）」とか、「対話者」とよぶのだ、と言うわけですよ。相手の話を専門家として聞くと、制度のなかでこうすべきだとか、専門家としては何もできることはないとか、となってしまうけど、さきほどの菊竹さんのエピソードのような、すこしスピリチュアルともいえる話も聞けるわけですよ。それで相手からお金をどれだけもらえるか、というのは国際会議では話されないの、わからないですが。おそらく、アーヘンバッハのような場所に来るひとは、心理相談や医療では聴かれない話をしたいのだろうとおもうんです。

ただ、日本でそのような場所をどうやって開くのか、というのはむずかしい。菊竹さんみたいに、紙きれ一枚をうまく使って、いっぽうで給料をもらいながら、業務内でなんとかそういう時間をつくるというのは、これ、「理性の狡知」ですよ。なんらかの資格か、あるいはわたしみたいに教員という立場がないと、聴くための場にはいられない。ですから、その紙きれ一枚も使いよう次第で、資格や立場があるからできることもある。「哲学カウンセリング」なんて怪しいものに、ひとがお

金払うわけじゃないじゃないですか。

菊竹 わたしは、ひとの話を聴くのがおもしろい、というだけで聴いているんですけど、たしかに、組織にしながら、できるだけ別のことをやりたいとはおもっています。聴き方とか確かに意識してることはいろいろあって、相手がうまく話し切れなれないから、もうなんか、からだの使い方とか含めて聴いていて、適当にやるわけではないです。

小泉 使っている技術はあるなとおもいます。お二人のこれまでを知ってるのでおもうんですけど、何とか一緒にいるための技術、というか、からだの居方とかことばの使い方とかが、やっぱり、簡単に言うと、ていねいなんですね。そのあたりのお話は、きょうあんまり出てこなかったんですけど。

金 やっぱ何かあるかなとおもうんですけど、なんですかね、あんまり言語化したことがないので…。学習支援のこどもたちは、別に勉強だけしに来てるわけじゃなくて、いろんな相談もそれぞれの講師のひとにけっこうするんです。最近、わたしは直接誰か教えるところにあんまり入ってなくて、むしろ、前まで来てた子がまた最近ちょっと来て相談したいというときに、話を聞いたりすることがあって、そのときに一対一で話を聴いているときと、その子は中国から来た子がなんで、中国の相談員に来てもらっていっしょに聴く、ソーシャルワークのひとが入っていっしょ話を聴く、という何パターンか違う聴きかたをしたんです。違うなあとおもいましたね。こんなふうにかこのひとたちは話を聞くんだなあ、とおもって、何が違ったのかなとかんがえてるんです。やっぱり専門家じゃないってことか関係してるかもしれないんですけども、いいわるいということではなくて、わたしはそのひとが相談していることについて、それを解決しようとおもって聴いていない。話を聴いて「そうか〜」って言ったり、「そらしんどいなあ」って、いっしょにしんどがってみたり、「面白いなあ」みたいな感じで話を聴いて、もちろん、これがやりたいってことがあれば、「じゃあどうやったらいいか、いっしょにかんがえる」ってかんがえるんですけど。

ほんま 菊竹さんといっしょに「1対13」という歌を作ったんですけど、そのきっかけとなったのはこういう話です。二人で和永さんの職場を尋ねて、「最近どうですか？」ときいたら、和永さんが「こどもたちの争いが絶えないんです」と言うんですね。「なにが大変なんですか？」とさらにきくと、「仲裁したくない、こどもたちどうしの争いだから、どういうわけで、争っているのかがよくわからないんです。」と。とにかく、なんとか和永さんがごまかした、というか、うまくやりすごしたそうです。こどもたちのあいだで起こっていることは、もしかしたら、潜在的には問題になるかもしれないんですけど、そこにはあえて介入しないで流して、砂をかけたみたいなのをした、と。ことを大げさにせず、そのまま放っておく、つまり、こどもたちの間に入って行くのでもなく、見て見ぬふりをするのでもない、そのどちらでも

ない絶妙なことを和永さんはしたんですね。まあ、あとでその歌を聴いてください。でも、そういうことって、言語化しにくいですよ？現場で、和永さんだからこそできる、問題のスルーのしかた、というのがある。専門家だと、そういうことはできなくて、「ここはアサーション（適切な自己主張）ができないといけない」とおもって、このこどもの側に立たないといけない、となるでしょう。でも、そうはならない。

金 そういう専門家の前では、アサーションだいじですよ、といますけどね。（笑）それはそれでだいじですから。でも、じぶんはそういう専門家の態度をとれない。「1対13」というのは、わたしが、たまたま、こどもたちがひとりと13人とで、すごい口論をやっている場面にでくわしてしまい、でも、なんでやってるのかわからへん、という話で、わたしはいちおう、責任者なんですけどね。結局、わたしがそのひとりのこどもの代わりに「ごめんごめん」って謝って13人から引き離して、その子が乗ってきた自転車を指さして、駐輪場にとめてきて、と言った。そういう場面があった、ということです。それも臨床哲学ですか？

ほんま むかし、臨床哲学の院生で、阪大の教員もされていた、西川勝さんは、認知症ケアの場面で認知症のひとがいうことを、真に受けずにうまく聞き流すのを「パッシングケア」、つまり、問題を問題にしないでうまくかわすのがケアだ、と書いてたんですね。西川勝さんは、鷺田さんみたいに、そうやって名前をつけて概念化するのがうまい。でも、名前はつけなくていいとおもうんです。実践って、そういうものでしょう。「どうやったん？」ってきかれて、「いや、てきとうにやりすぎただけだから」「ふーん」というかんじで。専門家は、名前をつけて、こういう状況であれば、こうこうすればこうなります、と説明できるかもしれないけれど、「メチエ」って、そういうものではないとおもう。

「名もなきしごと」という、かつておんたちが家でしていたことがありますよね。それがとてもだいじで、ケアリングの基本だとおもうんです。名もなきしごととは、やりかたがきまっているのではなく、臨機応変にそこにいるひとをちゃんと見てやる、それを和永さんはしている。

小泉 たしかに、わたしのしごともそういうことをやっていますね。和永さんの場合は、歌になっているのがいい。すごく伝わるし、受けとれる。それが、たとえば研究論文のために、このエピソードを書き残しておこう、という姿は想像できない。それではうまく伝えられないものがある、とおもいました。あと、おふたりがされていることのなかで、書くとか、文字にするということが、どのようになされているのだろうか、というのがききたいなとおもいます。それはどんなかたちでもいいのですが、さきほどは、歌という例をだしていただいたんですけど、日記をつけるとか、研究になるなにかをしていきたいですか？

金 歌のことを補足すると、お二人がわたしの働いているところ（IKUNO・多文化ふ

らっと)で、「猪飼野ちいさな音楽祭」をやるということで、この場所にまつわる歌を作ろうというのがあって、このエピソードを聞き取ってもらって、ふたりの手でその場で歌詞ができて、曲がついた、という感じでできた歌なんです。それはわたしも「すごい、こんなことができるんだな」とおもったんですよ。わたしはそんなに本当に書かなくて、日記も書けない。コツコツと続けられないから、日記も、10年前に書いた頁の次、みたいなそんな日付のファイルが残ってるんですよ。きいてもらったときに、しゃべったら、みんなが書いてくれるしかない。

小泉 日常で起きていることを言語に変換する、ということほどのように起こっているんでしょうか？

菊竹 そうですね。文章を書くのそんな嫌いじゃないんですけど、わざと文章を書かなかった時期があるんですね。何かその。歌とか絵とかはやるけど、わざと文章は書かない。というのは、文章を書くとしぶんがカッコつけちゃうことがあるので。でも、宣伝ではないんですが、しぶんでもなかなかいいものができた、とおもうzineがひとつあって、2020年くらいに書いたんですけど、わたしの家族のことを書いたんです。母が家事ばかりやっていて、旅行に行けない、って言うんですね。それで、どうにかして母を旅行に行かせるという実験をしたんですよ、家族との対話のなかで。その実験記を書いたんです。それはとても楽しくて、こういうことをかंगाえて、こう言ってみたい、とか書いた。主張する、というのは、そういう気持ちにならないのできないんですが、(実験記)が積み重なっていくのは、すごく楽しかったですね。

ほんま お話しされたように zine の場合もそうですけど、文字だけではない伝達の場合というのは、やっぱりだいじじゃないですかね。和永さんの働いておられるところにも、やっぱり実際に行ってみたいといけない。いまも、大阪大学の人間科学研究科の院生さんが、そこに行こうとしてますけど、調査という仕方であったとしても、やっぱりそこにいって、一定の期間過ごさないといけない。調査している時間だけいるのではなくて、少なくとも1日はそこにいるという感じで、長いスパンでそこで場を感じるということをししないとわからないことがいっぱいある。ましてや、そこに長時間いた経験というのは、文章にはできない。和永さんがサボっているだけではなくて、できない、とおもいます。

わたしの問題提起に戻りたいとおもうんですけど、その場でその人のやってることを直接見ないとわからないことって、やっぱりだいじだとおもうんです。なぜか(分野にもよりますが)研究となると、それが低く見積もられることがある。いつでもどこでも、それを読めばわかるようにする、なんて、そんなこと、ありえないとおもうんです。ところで、さいごに、小西さんに一言いただきたいのですが、小西さんはこういうお二人のことを研究として書いてみたい、とおもわれますか？

小西 そうですね、そうおもうことも若干あります。わたしは自分の話を聞き取って

ほしいと自発的におもってくれるひとの話を書きたいというのがありますね。道徳的にも。それがインタビュー調査の大前提です。わたしももともとはインタビュー調査というスタイルに疑念をもっていたというか、しないと決めていたタイプだったんですけれども、つよく誘ってもらったことがあって、それが大きなきっかけになって、インタビューをするということを経験したんですよね。その結果として、インタビュー調査が研究になったということが経緯としてはあるんですけれども、その調査という名指しを採用して行っていることは、たとえば、きょう聞かせていただいたような話と聴くという経験と大きなちがいはない、きょうの話は研究になるインタビューとそこまで大きなちがいはない、とおもいます。わたしがインタビューをするときも、この話に意味がある、みたいにおもっていないところもあります。聴きかたに関しても、こういうふうの研究を作っていく、というのではない聴きかたができるところが、わたしがわたしの用語として「インタビュー」と名指したいもののいいところであるとかんがえます。それはたぶん、みなさんがお話してくださったような現場での活動のなかにも、もしかしたら、似たような聴くという営みがあるのかな、わたしが「インタビュー」という言葉を当てはめているものについて、みなさんとどこか共有できる部分があるんじゃないかなとおもわれます。そうですね。だから、そういう（お二人について研究する）こともできる話だと感じました。

ほんま 小西さんだけではなくて、和永さんのようなタイプのひとと組んで研究するというのありですね。書くことがすごく好きなひとが共同研究者として書く、という。

小西 そうおもいますね。どちらかという、わたしはじぶんの話を書くことを自ら積極的にしたいとおもったことはなくて、他者の話や他者との経験を書くこと、あと、他者の経験の一部を取り込んだ自己として書くことが圧倒的に好きなんですよね。わたしがやってきたのほとんどそういうことなので、わたしの書いたものにわたし固有の自己を発見しようとする他者がいても、それができないものになっています。現在、ご依頼いただいて、今までの執筆物のなかでは一番じぶんのことを書くという大変しんどいことをやっています。それでもやっぱり、自分中心の話にはなっていないからおもいます。どうしても他者が張りついてきますね。やっぱり他者のことが好きなんだと改めておもいました。そういう性分なので、わたしが共鳴できる人との研究で、わたしが書き手を担当するということはとても光栄なことだとかんがえていますね。

ほんま マッチングですね。マッチングはとてもだいじだとおもいます。過去にも、堀江さんが看護師さんといっしょにかかるとか。最近、残念だと思うのは、共同研究がまったくなされていない。研究が超個人主義になってしまっているの、だれかと組んで研究するというのを、みなさんぜひやってください。はい、これで

おしまいですが…

参加者 さいごに和永さんの歌をうたってください。

ほんま では、フォーラムとしてはおわりますが、アトラクションということで、菊竹さんとふたりでうたいます。

1対13

作詞 金和永 編・曲 ほんま なほ&きくたけももえ

グラウンドに降りたら きいろい おおごえ
またケンカかな とおもったけど
いつものケンカ じゃなかった

1対13

1対13

1対13

DOYAの子も ほかの子も 入り乱れ

13のこえは 「オラオラやってみろよ」
(会場コーラス) オラオラやってみろよ～
負けてない 1つのこえ でかいこえ
(一番声のおおきい人：おおきなこえで、~~~~~)
わたしは ただ見ていた
なんでやってるんか わからへんから

1対13

1対13

1対13

DOYAの子も ほかの子も 入り乱れ

こどものことは こどもたちのこと
仲裁は したくない
わたしは 13人にいった
「代わりに謝っとくわ！ゴメンゴメン」
なんか知らんけど

1対13 (くりかえし)

DOYAの子も ほかの子も 入り乱れ

そのあと、1人と一緒に そこを離れて
その子にいった
「自転車で中まで入ってきてるから
とりあえず駐輪場にとめてきて」

ほんま ありがとうございました。

(ほんま・なほ、きむ・ふあよん、きくたけ・ももえ、こいずみ・あさみ)